

筑後国府跡

—第 289 次発掘調査報告—



平成 30 (2018) 年 3 月
久留米市教育委員会

序

久留米市は「一人ひとりを大切に、安心、安全、活力に満ちた久留米づくり」を進め、日本一住みやすいまちを目指しています。その取り組みのひとつとして、久留米の歴史を調査し、多くの人々に知っていただくことで、市民の方が郷土愛を育んでいただけるよう努めています。

筑後国府跡第 289 次調査では古代の柵列や溝、土坑などが発見され、当時の人々の生活を知る貴重な資料を得ることができました。

今回の発掘調査に際して、土地所有者の■■■■様と近隣住民の皆様に多大なご協力をいただきました。心から御礼申し上げます。

平成 30 年 3 月 31 日

久留米市教育委員会
教育長 大津 秀明

例 言

1. 本書は、平成 29 年度に■■■■氏の委託を受けて、共同住宅建設に先立ち実施した、筑後国府跡第 289 次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が主体となり、市民文化部文化財保護課の小川原励が担当した。
3. 遺構実測図・土層図の作成は、小川原と大熊澄子が行い、浄書は小川原が行った。遺物実測図の作成と浄書は、小川原が行った。
4. 遺構写真はマミヤ RZ67、遺物写真はニコンデジタルカメラ D700 を用いて小川原が撮影した。
5. 図面の方位は全て座標北を示す。基準点の座標は、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を用いた。なお平成 28 年に発生した熊本地震後の座標補正を行っている。
6. 本書に使用した遺構の略記号は、S A－柵列、S D－溝、S K－土坑、S P－ピットを示す。
7. 筑後国府跡第 98 次調査で検出された遺構の遺構番号は、当時の番号を用いている。
8. 遺物の色調は、『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、平成 9 年）に拠った。
9. 出土遺物観察表と写真図版の遺物番号は同一である。
10. 出土遺物・図面等の記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
11. 本調査の略記号は T K H－289、調査番号は 201707 である。
12. 本文の執筆・編集は小川原が行った。
13. 表紙の写真は北上空から撮影した調査地の全景である。

本 文 目 次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	9

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成 29 年 4 月 10 日、土地所有者の■■■■氏から、久留米市合川町 140 番 1 における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡の範囲内であり、以前同地番で実施した筑後国府跡第 98 次調査でも遺構が確認されたため、発掘調査が必要である旨を回答した。4 月 27 日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出され、土地所有者と久留米市は、平成 29 年 6 月 5 日付で筑後国府跡第 289 次調査の委託契約を締結した。調査範囲は建物建設予定地に設定した。調査面積は 400 m²である。

現地での発掘調査は、平成 29 年 7 月 3 日に着手して 8 月 11 日に終了し、平成 30 年 3 月 30 日に整理作業を終了した。

2. 調査の体制

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：大津 秀明

調査総括：久留米市 市民文化部

部 長：野田 秀樹

文化芸術担当部長：甲斐田 忠之

次 長：西村 信二

文化財保護課

課 長：馬場 博文

課長補佐：山崎 万里子

課長補佐兼主査：白木 守

主 査：水原 道範

事務主査：豊福 早苗 塚本 映子

調査担当：小川原 励

整理担当：米澤 美詠子

発掘調査現場臨時職員

井上 知義、江藤 光男、大熊 澄子、大塚 ヒロ子、佐田 農夫男、日吉 政勝

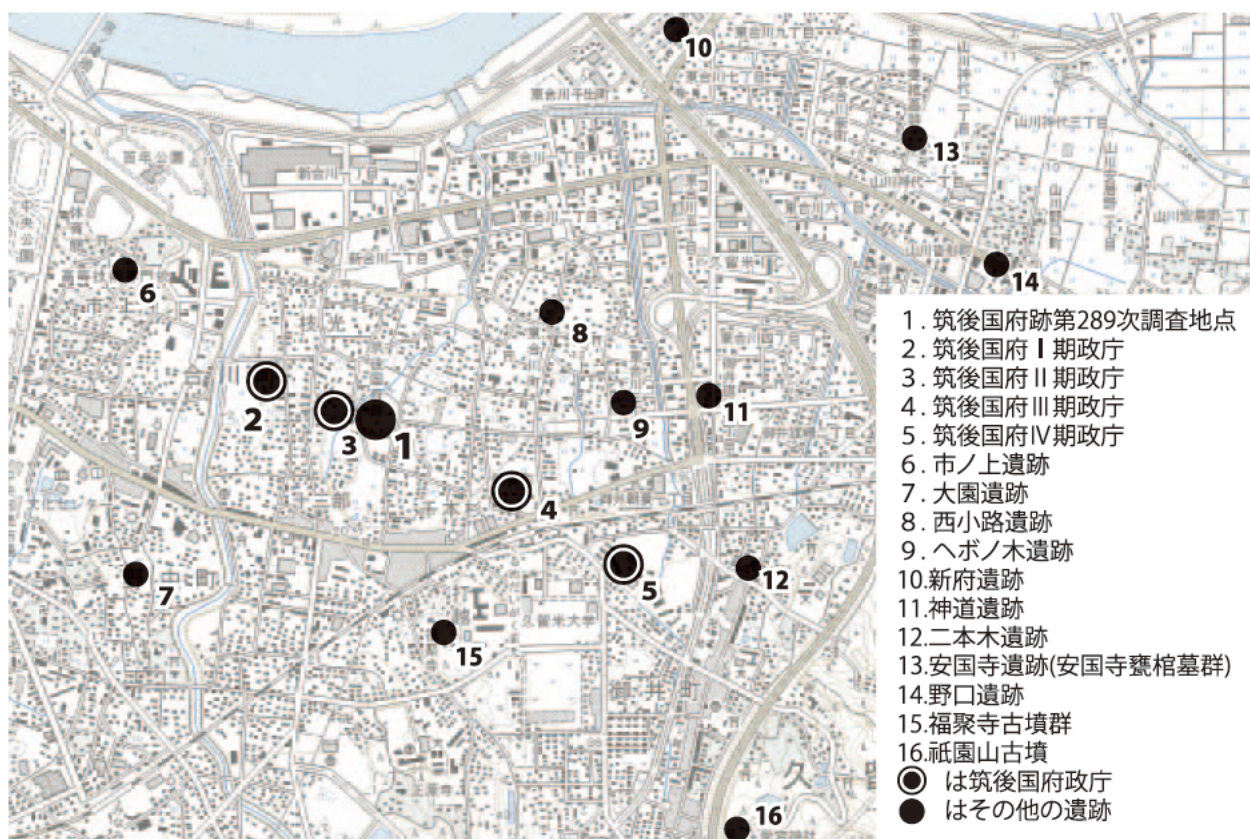
発掘調査整理臨時職員

猪俣 弘治

Ⅱ．位置と環境

筑後国府跡の位置する久留米市は、九州最大の穀倉地帯である筑紫平野の中央に位置し、交通の要衝として発展してきた。筑紫平野の南側には耳納山地が連なり、その西端には延喜式内社である高良玉垂命神社（現高良大社）が鎮座する高良山（312.3m）が聳える。ここから北西に派生する通称枝光台地に筑後国府跡は立地し、西鉄久留米駅の東方約1.6km付近に、東西1.0km、南北0.7kmの範囲に展開している。台地の南側には水縄断層帯が東西に伸び、断層崖下には湧水点がいくつも見られる。台地の西側には高良川が、東側には井田川が流れ、北方の筑後川氾濫原、南方の水縄断層帯の断層崖が国府域の四方を囲む。

耳納山地西麓付近は、発掘調査が多く行われている地域である。旧石器時代は二本木遺跡や安国寺遺跡、野口遺跡で、縄文時代以降の遺構埋土や包含層から遺物が出土している。縄文時代は前期～後期の野口遺跡を始め、石冠や石棒が出土した西小路遺跡、さらに筑後国府跡、神道遺跡、水洗遺跡、横道遺跡、新府遺跡、安国寺遺跡などで資料が得られている。弥生時代は中期～後期の墓地とその祭祀の関係が注目される土坑が検出された。国指定史跡の安国寺甕棺墓群を始め、筑後国府跡や市ノ上遺跡、へボノ木遺跡、二本木遺跡などで遺構や遺物が発見されている。古墳時代では市内最古の古墳である祇園山古墳や福聚寺古墳群など山裾や丘陵上に広がる。奈良・平安時代の遺構や遺物は筑後国府跡を中心として、へボノ木遺跡や二本木遺跡など多くの遺跡から発見されており、当時の筑後国の中心地であったことがわかる。



第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2, 500)

筑後国府について

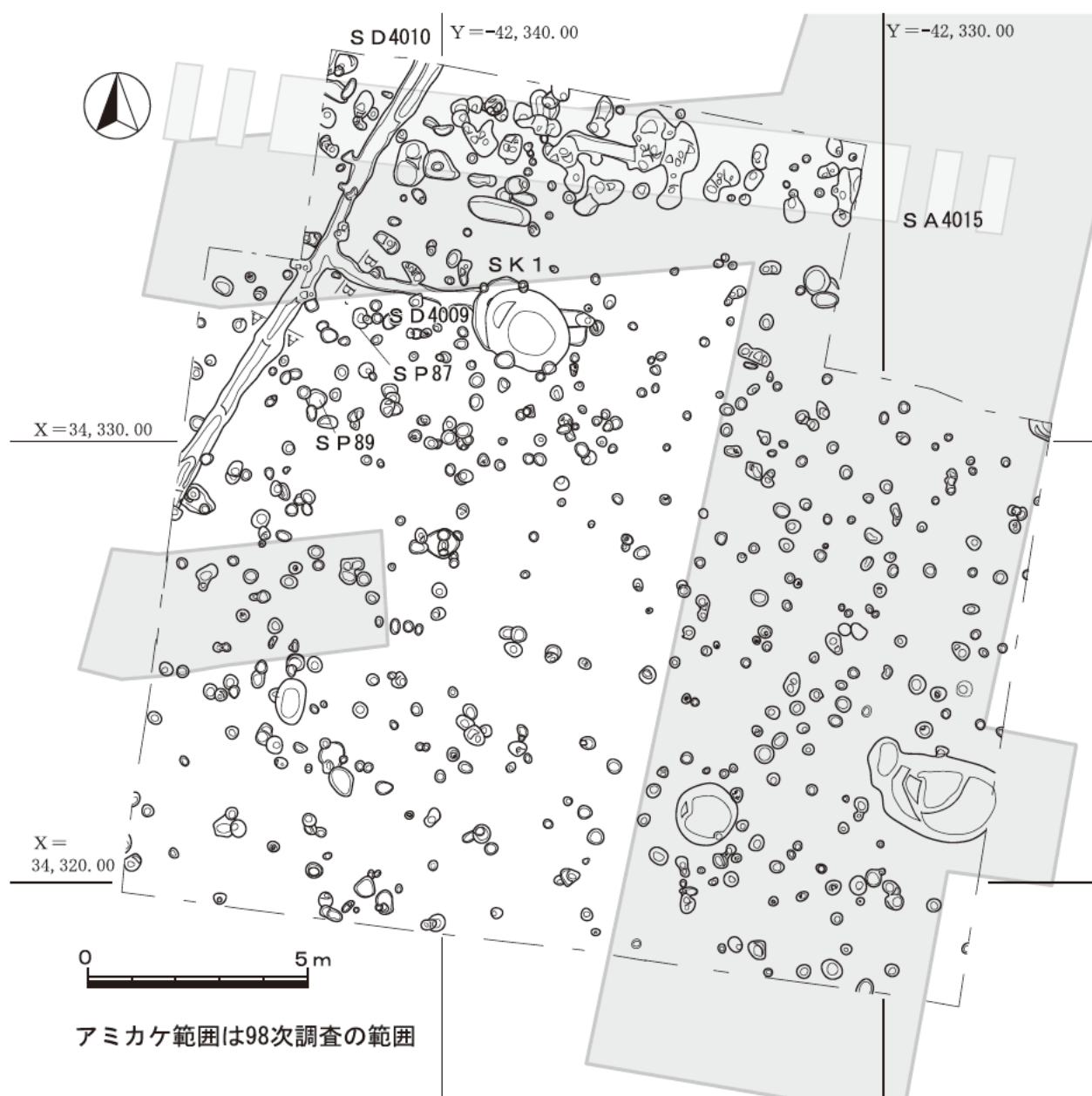
7世紀中頃、大溝や土塁、河川等によって囲まれた通称枝光台地上に軍事的性格が強い遺構群が造営される（前身官衙）。筑後国が成立した7世紀末～8世紀前半にかけて、前身官衙の領域を踏襲して筑後国府は成立し、南北約180mの築地塀で区画された遺構群が古宮地区に営まれる（Ⅰ期政庁）。8世紀中頃、Ⅰ期政庁から東へ約200mに、築地塀で区画され、9世紀前半には南北75m、東西67.5mの政庁が営まれる（Ⅱ期政庁）。Ⅱ期政庁と浅い谷を挟んだ南東約200m付近では、国司館跡も確認されている。Ⅱ期政庁は10世紀前半に火災により焼失したと推定され、さらに東へ約600m付近にⅢ期政庁が築造された。Ⅲ期政庁は幅約4mの大溝で区画された南北141m、東西137mの大区画をなし、内部からは、正殿や脇殿などの大型掘立柱建物が検出されている。付属する官衙群はⅢ期政庁の東側で確認されており、在国司屋敷と推定される施設も存在する。11世紀末には南東約400mへ再び移転し（Ⅳ期政庁）、『高良玉垂宮神秘書』に見える「今ノ符」と思われるこの政庁は12世紀後半頃まで存続したようである。「五条頼元書状」（『豊後入江文書』久留米市史第7巻所収）には、南北朝争乱期に懐良親王が「国符」に陣を置いた記事がある。実質的な機能は別として、筑後国府の名称は14世紀まで存続していたと推測される。

調査地が所在する久留米市合川町久保野では筑後国府跡第12次調査を皮切りに、これまで8回にわたって調査が行われている。本調査地は、第98次調査地の南西部にあたり、一部の範囲を重複する。第98次調査では8～13世紀の遺物が出土し、柵列や道路痕跡、溝などが検出された。第84次調査、第219次調査で柵列や溝の延長部が確認され、意図的に区画が施されていると考えられる。

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の目的と経過

調査地は推定国司館跡の南東約 200m に位置し、筑後国府跡第 98 次調査範囲と一部重複する。周辺の調査では縄文時代以降の遺構や遺物が確認されているが、第 98 次調査では、9～11 世紀を主体として多くの遺構が検出された。そのため、調査区南部における同時期の遺構の広がりを確認することを目的として調査を行った。平成 29 年 7 月 3 日に重機で表土剥ぎを開始し、その後、遺構検出を行い、平板測量による略図を作成した。その後遺構の掘削を順次行った。必要に応じて、個別遺構を実測し、写真撮影を行った。8 月 10 日に高所作業車を用いて全景写真を撮影し、8 月 11 日に器材を撤収、現地調査を終了した。遺構配置図はトータルステーションを用いて測量し、測量デー



第3図 筑後国府跡第 289 次調査遺構配置図 (1/150)



第4図 調査区全景（南上空から）

タは株式会社 CUBIC 製の「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、一部の遺構、土層図は水系メッシュ法（ $S=1/10$ ）で記録した。記録写真は、モノクローム・カラーリバーサルともに 6×7 で判撮影した。

2. 基本層序

調査地は北から南へ向かって緩やかに標高を減じる。調査区の北西部では地表面から下層に向かい、暗灰色粘質土が約 40 cm、黒色粘質土が約 30 cm 堆積し、検出面に達する。遺構検出面は褐色粘質土で標高約 15m ある。

3. 検出遺構

今回の調査では、古代の柵列 1 条、溝 2 条、土坑 1 基、ピット等が検出された。古代のピットが主体である。以下主要遺構について報告する。



第5図 S A 4015 完掘状況（南から）



第6図 S D 4009 完掘状況（西から）

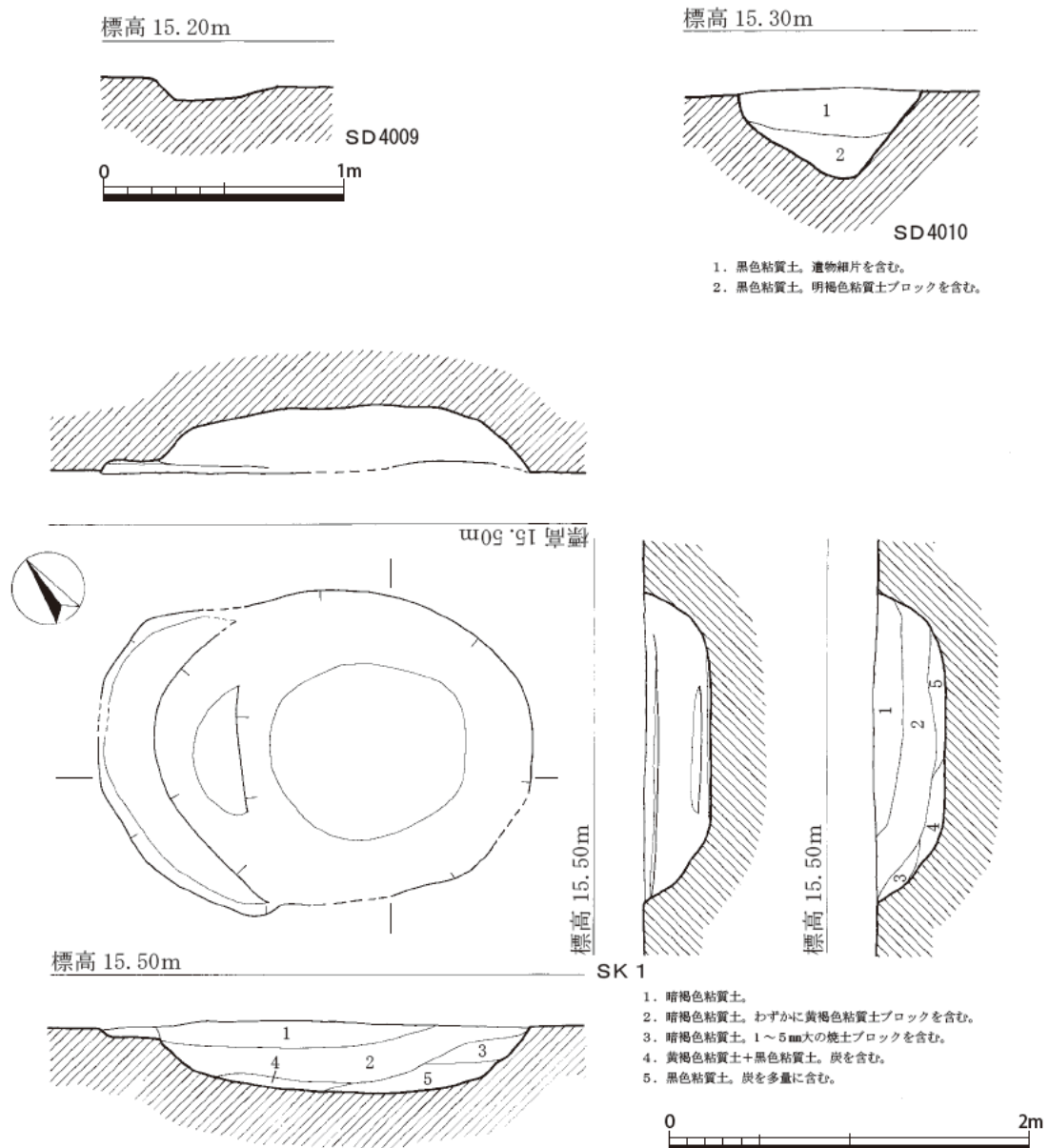
Ⅲ. 調査の記録



第7図 SD4009 土層堆積状況（北東から）



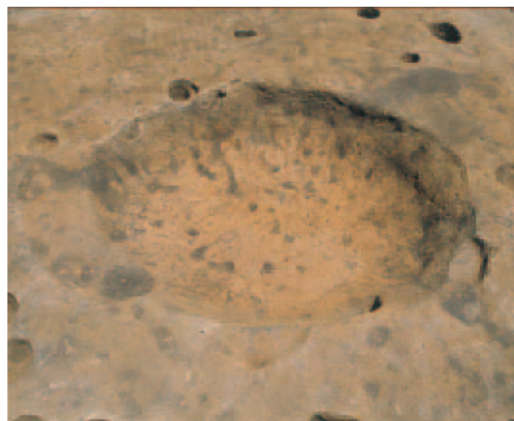
第8図 SD4010 完掘状況（南西から）



第9図 SD4009・4010、SK 1 実測図 (1/30、1/40)



第10図 SK 1 土層堆積状況（東から）



第11図 SK 1 完掘状況（南から）

柵列

SA4015（第4・5図）

調査区北部を東西方向に延びる柱穴列である。大部分が第98次調査で検出されており、今回は、調査区北西部の一部分を検出したのみである。非常に密な重複がみられる。生垣痕跡の可能性もある。軸方向はN-83~92°-Wである。調査区内の他のピットの検出面からの深さが10~30 cm程度であるのに対して、柵列のピットの深さは50~70 cmを測る。柵列はSD4010の西側、南側には広がらず、周辺状況から北側に角度を変えて延びると考えられる。埋土中から土師器の坏・小皿・甕などの破片が出土している。遺物からは詳細な時期を判断できないが、古代に属すると考えられる。

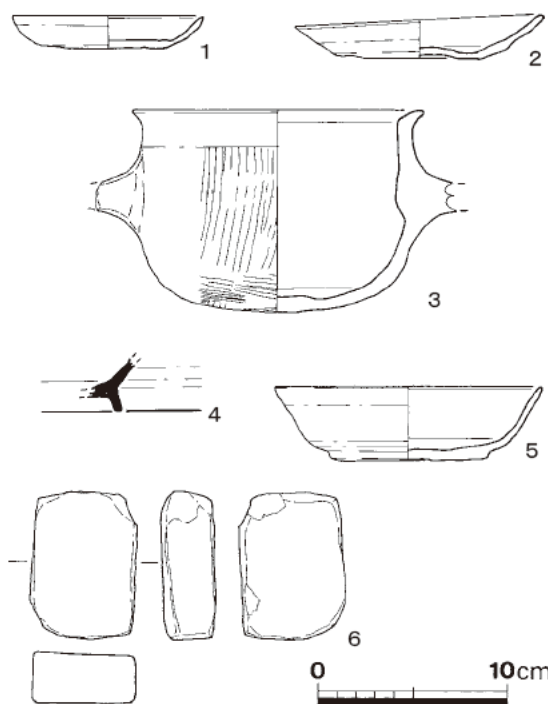
溝

SD4009（第7・9図）

調査区の北西部で検出した北西から南東へ延びる溝である。第98次調査時にも検出されており、SD4010に先出することが明らかになっている。またSK 1にも先出する。上面幅は40~50 cmで、検出面から最深10 cmを測る。埋土は黒色粘質土である。埋土中から土師器の坏・小皿・甕などの破片が出土している。遺物からは詳細な時期を判断できないが、古代に属すると考えられる。

SD4010（第8・9図）

調査区の北西部で検出した北東から南西へ延びる溝である。第98次調査時に検出されており、SD4009に後出することが明らかになっている。上面幅は40 cm~50 cm、検出面から最深部で30 cmを測る。埋土は黒色粘質土が主体である。埋土中から土師器の坏・小皿・甕などの破片が出土している。遺物からは詳細な時期を判断できないが古代に属すると考え



第12図 出土遺物実測図（1/4）

られる。

土坑

SK1（第9～11図）

調査区北西部で検出された土坑である。SD4009に後出する。平面形は長軸長3.3m、短軸長2.1m、検出面から最深55cmを測る。埋土中から土師器の坏・小皿・甕や須恵器の坏などが出土している。遺物の年代は、9世紀後半以降に属する。

4. 出土遺物

パンコンテナー1箱分の遺物が出土したが多くが細片で、掲載に耐えうる資料のみを報告する。

第1表 出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)	外面	内面	外面	内面			
1 第12図	SK1	土師器	小皿	9.9	6.6	2.8	にぶい黄 橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子)		201707 000003
2 第12図	SK1	土師器	坏	13.0	9.1	2.3	黒褐	にぶい黄 橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子、雲母)		201707 000004
3 第12図	SK1	土師器	甕	[14.8]	[10.0]	10.8	にぶい黄 橙	灰黄	回転ナデ ハケ、ナデ	回転ナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子)		201707 000002
4 第12図	SK1	須恵器	坏	—	—	—	褐灰	褐灰	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	微砂粒(角閃石)		201707 000001
5 第12図	SP87	土師器	坏	[14.0]	[8.4]	[3.9]	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子、雲母)		201707 000005
6 第12図	SP89	石製品	不明	7.7	5.2	2.8	—	—	—	—		軽石製	201707 000006

【凡例】数値の〔 〕は復元値を、() は残存値を、—は欠損または項目に該当する部位が無いことを示す。



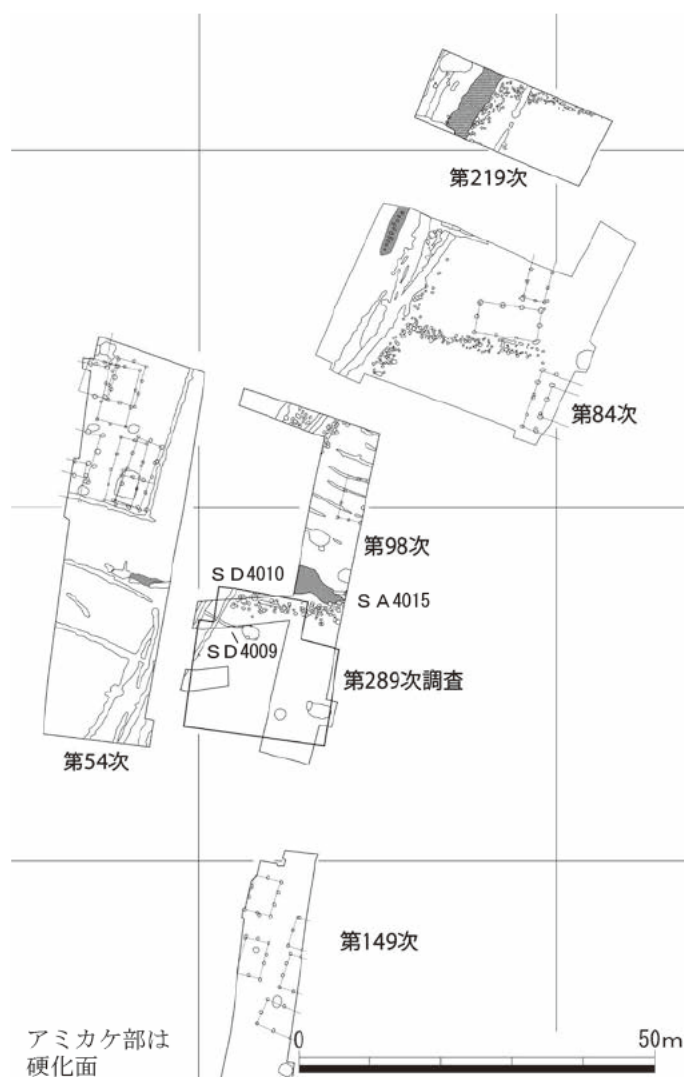
第13図 出土遺物写真①

5は土師器の坏である。底部を厚めに切り離している。6は用途不明の軽石である。6面が平坦な直方体を呈する。その他の詳細については第1表の出土遺物観察表を参照されたい。



第14図 出土遺物写真②

IV. 総括



第15図 第289次調査周辺遺構模式図 (1/1,000)

調査の結果、柵列1条、溝2条、土坑1基、ピット群などを検出した。出土した遺物は細片が多く、帰属時期を決定することが困難な遺構もある。SK1は土師器坏から9世紀後半以降に帰属すると考えられる。SD4009・4010は延長部が第54・第84次調査で確認されており、9世紀後半～10世紀中頃に比定されている。SD4009はSK1に先行していることも矛盾しない。SA4015も出土遺物が少なく、詳細な時期は不明であるが、SD4009とほぼ平行に走行し、SD4010の北側延長部と平行して北へ延びると考えられるため、溝と柵が同時期に機能していた可能性がある。

調査地南部はピットが多いが、柵列や掘立柱建物のように柱筋が並ぶものはない。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちくごくふあと だいにひゃくはちじゅうくじはつかつちょうさほうこく								
書 名	筑後国府跡-第289次発掘調査報告-								
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 3 9 2 集								
編著者名	小川原 励								
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課								
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp								
発行年月日	2 0 1 8 （平成 3 0）年 3 月 3 1 日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ちくごくふあと 筑後国府跡 だい289 じ ちょうさ 第289次調査	ふくおかけんくるめし 福岡県久留米市 あいかわまち 合川町 140-1		40203	30112	33 ° 18 ' 44 "	130 ° 32 ' 35 "	20170703 ～ 20170811	400㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構			主な遺物		特 記 事 項	
筑後国府跡 第289次調査	官衙	平安	柵列 1 条 土坑 1 基 溝 2 条			土師器・黒色土器 須恵器・石製品		第98次調査で検出された 柵列、溝が検出された。	
要 約									
調査地は国司館跡の南東側約150mの合川町久保野地区に位置する。第98次調査に隣接し、古代の柵列、溝の延長部と土坑を検出した。調査区南部にはピット群が広がる。									
土木工事の届出日		平成29年 4 月 24 日				遺物の発見通知日		平成29年 8 月 17 日 (29文財第729号)	

筑後国府跡	
— 第 289 次発掘調査報告 —	
久留米市文化財調査報告書 第 392 集	
平成 30 年 3 月 31 日	
発 行	久留米市教育委員会
編 集	久留米市 市民文化部 文化財保護課
	福岡県久留米市城南町 15- 3
印 刷	服部印刷株式会社
	久留米市梅満町 410- 1